日本文芸学会　第六一回全国大会次第

第一日　二〇二五年七月五日（土） 午後三時開始（大会受付　午後二時～）

大会会場：Academic Base 南棟４階ＢＳＣ４０５教室

会場校挨拶（午後三時～三時五分）　追手門学院大学文学部長　西尾宣明

開会の辞（午後三時五分～三時一〇分）　追手門学院大学　東口昌央

研究発表（午後三時一〇分～五時三〇分）

『満韓ところどころ』における馬賊と越境　二松学舎大学大学院　王　風

詩誌『ロシナンテ』の詩人たち
――新しい戦後詩史観の構築へ向けて――　日本大学大学院　舟橋令偉

大西巨人『神聖喜劇』と戦後派
――実作における「政治と文学」の問題――　二松学舎大学非常勤講師　杉山雄大

※開会に先立ち、理事会を開催します（午後二時～三時、Academic Base 南棟４階ＢＳＣ４０６教室）

懇親会（午後六時～八時、食堂棟）

第二日　二〇二五年七月六日（日） 午前一一時開始（大会受付　午前一〇時三〇分～）

大会会場：Academic Base 南棟４階ＢＳＣ４０５教室

研究発表（午前一一時～一一時四〇分）

時空論における自己構築
――大江健三郎『個人的な体験』を中心に――　西安外事学院　成　暁琳

総会（午後一時～午後二時）

※日本文芸学会論文賞論文賞選考結果発表

特集「文芸と土地――場をめぐる力学」（午後二時～五時二〇分）

『とりかへばや物語』の宇治　京都橘大学　野村倫子

浦島伝説の地の変遷　静岡英和学院大学　畑　恵里子

内田百閒『冥途』における幻想の場の生成について　大阪体育大学　吉川　望

閉会の辞（午後五時二〇分～）　日本体育大学　今野　哲

第三日　二〇二五年七月七日（月）

大阪文学踏査（事務局で資料を用意しますので、各自でご踏査ください）

《七月五日（土）》

研究発表

『満韓ところどころ』における馬賊と越境

二松学舎大学大学院　王　風

明治四三年三月から六月まで、『門』は『朝日新聞』で連載された。漱石はこの小説で、京都の大学を中退し、転々して実家の東京へ戻り、役所に勤める野中宗助と、妻の御米との二人が、家族や親友の人間関係の葛藤の中で周旋しつつ、家計をやりくりする内容を物語った。坂井は宗助夫妻の借家の主人であり、その弟は「冒険者」と評され、金稼ぎのために満洲へ渡って放浪した人物である。「弟」の知り合いの安井は、宗助の大学時代の親友、御米の元恋人である。御米が宗助に奪われ、一時は病気で消沈した安井も、やがて外地の満洲へ渡った。

「弟」と安井との二人の「冒険者」は、いずれも作中に実際に登場していない。その経歴はいずれもほかの人物から伝えられたものか、想像されたものである。一方、作品の外側の読者に「冒険者と満洲」のイメージを想起させるのは、新聞連載と同時に掲載された外地に関する新聞記事であり、前の年に同じ『朝日新聞』で連載された夏目漱石の紀行文『満韓ところどころ』でもあろう。

一九〇九年九月から一〇月、約一ヶ月半の日程で、夏目漱石は中国東北地方と朝鮮を旅行した。漱石が帰国した一〇月二一日から一二月三〇日まで、その旅行の紀行文『満韓ところどころ』は東京と大阪の『朝日新聞』に五一回にわたって断続的に掲載された。

その紀行文の作成過程について、連載中断や語られない韓国などの問題点をめぐって、断片的に先行研究が指摘してきた。しかし、旅行中に書かれた日記と『満韓』とを細かく比較対照することはまだ十分になされていない。

本発表はまず、『満韓』の各章とその素材となっている日記の記述とを一日ずつ照合し、日記から『満韓』へと「転写」される過程の中で人物についての修正が行われていたことに注目する。そのような私的文献である日記から、公的な性格を持つ新聞連載へと表現の場が移る過程に現れた作者と編集者との植民地意識を指摘したい。

そして、日記と『満韓』において修正されたすべての登場人物の中で、日記に記されていないが、『満韓』の本文で印象深い存在になっている「若い女」と「馬賊」を取り上げる。『門』において、安井は宗助に恋人を奪われて、満洲で「冒険」生活を送ったが、そこで焦点化されたのは「異性」と「危険」という二つの要素であった。しかし、安井が満洲にわたってからの経歴の中で、その要素に関する内容は『門』においては捨象されている。したがって、『満韓』における異国情緒とセクシュアリティとをまとった「若い女」と、日本人に敵意を持つ暴力の象徴である「馬賊」は、そのような空白を補完する機能を担っていた可能性をここで提起したい。

詩誌『ロシナンテ』の詩人たち
――新しい戦後詩史観の構築へ向けて――

日本大学大学院　舟橋令偉

日本における戦後詩研究の課題について、疋田雅昭は「戦後詩史のなかで「荒地」派の活動より後の時代の研究が進んでいるとは、到底言い難い現状がある」（書評「田口麻奈著『〈空白〉の根底　鮎川信夫と日本戦後詩』」）と指摘している。

戦後詩の始まりを告げたのは、鮎川信夫・田村隆一等の「荒地派」の詩人たちだ。彼らは『荒地』（一九四七～四八年）『荒地詩集』（一九五一～五八年）において、戦争の記憶と死んだ友人の面影をもとに詩を書き、戦後という「空白」の時代に、「始まり」の言葉を刻みつけた。従来の研究には、「荒地派」を原点に据えつつ、「戦争体験」をキーワードに戦後詩を読み解くものが多い。それは戦争の記憶が薄れていくにつれ、詩は思想としての力を失っていくことを前提とした読み方でもあった。荒地派は常に「回帰」すべき「原点」と見なされ、「戦争体験」=「思想の深さ」という前提は、そのために温存されてきたとも言える。

荒地派の以降に登場する詩人たちは、「戦争体験」から切断され、「実存的関心も社会的関心ももたない」（吉本隆明「戦後詩人論」）とされる。五〇年代を代表する大岡信・谷川俊太郎等は、日常を美しく歌う「感受性の祝祭」（大岡信）と呼ばれ、六〇年代を代表する天沢退二郎・鈴木志郎康等は、レトリック重視の「修辞的な現在」（吉本隆明）と批判された。

「荒地派」と荒地派以降の詩人たちとの間に「切断線」がある限り、戦後詩研究は進んでいかないだろう。本発表では「戦争体験」=「思想の深さ」という構図を一新するために、戦争体験の有無に縛られない戦後詩の読み方を、詩誌『ロシナンテ』（一九五五～五九）の詩人たちを通して提示したい。

『ロシナンテ』とは、石原吉郎と好川誠一によって創刊され、勝野睦人が加わることで、詩史的な位置を確立した詩誌である。石原はシベリア抑留体験をもとに詩と批評を書き続け、戦後を代表する詩人となった。好川と勝野は二人とも夭折したため、文学史上、ほぼ無名の存在である。

野坂昭雄は『ロシナンテ』に掲載された作品について、「多くの作品が詩人の日常的な感覚に基づいて創作されている」「『ロシナンテ』は明らかに『荒地』寄りの立場を取り、詩の集団性を拒否する鮎川の詩的な態度に共感していた」（「シベリアからの帰還者」）と述べている。

『ロシナンテ』の特異性は、『櫂』の詩人のように「日常的な感覚」で詩を書きながらも、「荒地派」に接近できる感性を有していたことである。特に若い好川と勝野の詩は、「戦争体験」がなくとも、実存的な詩が書き得ることの証明となるだろう。本発表の前半部では、五〇年代に創刊された他の詩誌と比較しながら、『ロシナンテ』の思想的特徴を明らかにし、戦後詩史に位置づける。後半部では「ロシナンテの三羽烏」（小田久郎）と呼ばれた、石原・好川・勝野の詩を取り上げ、その詩に表現された人間の「孤独」に迫っていく。

大西巨人『神聖喜劇』と戦後派

――実作における「政治と文学」の問題――

二松学舎大学非常勤講師　杉山雄大

大西巨人は「先頭部隊の責任」（一九五二・十一）で、「先頭・指導部隊の責任・使命」の「自覚と実行との不十分・不徹底」が現在の革新勢力の問題であると述べ、野間宏『真空地帯』（一九五二・二）の「主要欠陥」もその点に存在すると指摘した。そのうえで井上光晴『重いS港』（一九五二・九）の主人公が、コミュニストであるにもかかわらず、運動の実践を「道徳的」、「近代主義的人間主義」的にしか捉えていないことを批判し、「井上について見られるものは『真空地帯』における野間の根本欠陥の逆方向での表われ」であると論じた。

当時、巨人が野間の『真空地帯』と井上の『重いS港』、『手段』（一九五二・十一）を、ともに革命運動に対する責任の問題という観点から批判していたことの意味は、まだ検討されていない。しかし、巨人の指摘は戦後派における「政治と文学」の実践の弱点を浮き彫りにする重要な問題提起になっていたと考えられる。

戦後派の第一声と呼ばれる野間宏『暗い絵』（一九四六・十）は、戦時下の学生運動とそれに対する弾圧という二つの〝政治〟に挟まれて犠牲となった学生らと、「生命を粗末にする」ことを忌避して運動から離脱してゆく主人公との関係性を描いた小説である。本作が「目的のためには手段をえらばぬ」〝政治〟を忌避しつつ、戦争体験を止揚した新たなヒューマニズムを模索する『近代文学』創刊同人から高く評価されたのは当然の成り行きであったといえる。だが、戦後派の「政治と文学」論には〝政治＝加害者〟対〝文学（ないし、その目的たる「人間」）＝被害者〟という図式が潜んでおり、その実作も〝被害者〟による〝政治〟の告発という一方的な構図に収斂する傾向を持っていた。野間の『真空地帯』も、陸軍内務班という戦時下における〝政治〟の先鋭的な部分を、兵士から「人間」の生活を奪うものとして〝被害者〟的な視点から描いた小説であり、また、日本共産党の内在的批判を試みた田中英光と井上光晴の小説も〝被害者〟による告発という形式をとるものであった。

巨人の『黄金伝説』（一九五四・一）と『神聖喜劇』（一九八〇・四）は、民衆との討議を通じて、革命的な集団を組織してゆく知識人の営為を描いている。意識されているのは革命運動に対する責任であり、それは〝政治〟の非人間性の告発や暴露を超えて、変革の実践を具体的に描出することを書き手に要請するのである。ここに巨人における「政治と文学」の実践があり、ほかの戦後派作家に対する独自性が認められるのである。

佐々木基一「戦後の決算――『神聖喜劇』をめぐって」（一九六九・八）は『神聖喜劇』を「大西巨人における戦後体験の決算」と捉え、敗戦直後の創作や『真空地帯』論争、大西・宮本論争との関連を指摘した批評である。本発表は、佐々木の指摘を出発点として、戦後派の問題という文脈から『神聖喜劇』の文学史的な意義を検討する試みである。

《七月六日（日）》

研究発表

時空論における自己構築

――大江健三郎『個人的な体験』を中心に――

西安外事学院　成　暁　琳

大江健三郎の長編小説『個人的な体験』は一九六四年に新潮社より刊行された。『個人的な体験』は障害児の誕生を題材とした作品であり、体型と状態が鳥に似ている主人公「鳥」はとても平凡で懦弱な人だ。少年時代からアフリカへ冒険に行きたい夢を持っている「鳥」は自分の障害児の誕生後、この新生児の死を期待するという論理的苦悩に陥るから、性とアルコールで自分を麻痺させた。最後に、自分ならではの経験をしているうちにアイデンティティを再構築し、障害児に直面し共生するヒューマニズムの決断に至るという話である。

『個人的な体験』の冒頭に「鳥」が本屋でアフリカ地図を眺めながらため息をつく空間描写及び初夏の夕暮れの暑という時間描写がある。そして、小説の結末では秋の終わり、退院前、「鳥」は妻と義父母が特児室の前に待ち受けているという時空の描写で閉じられる。小説はこのような時空体で展開されたと思う。また、作品では非連続時間の進行と空間の転換が頻繁に現れ、時間が経ているうちに、空間転換の特徴も表した。すなわち夏から秋への時間の推移に連れ、夢と未来を象徴する本屋から現実の嬰児室への空間に転換した。こういう時空論の下で、主人公がついに心の闇を突破したことがはっきり展開された。カッシーラーが「空間と時間はあらゆる実在が関連づけられる枠組みである」と述べたように、作者がこのような時空の叙事構造を踏まえて「鳥」の自己構築を巧みに描き出したと思う。

カッシーラーはさらに、「空間と時間は芸術構造の内部に存在し、建築的全体を支える二つの柱である」と指摘し、「時空構造の探求は、最終的に人間自身の問題へと到達する」と論じた。主人公「鳥」は迷いと無力感がある戦後日本青年を代表した。それと同時に「鳥」はどのように苦境を脱するか新たなアイデンティティを構築するかは時空論の視野から解読すると、新たな視点となり得ると言えるではないだろうか。そして、現在、中日両国において時空論を通して『個人的な体験』における主人公の自己構築を探求した研究はまだ少ないから、この観点を踏まえた考察は意義深いと思う。バフチンの思想を引くホークイストの言うように、「時空座標（time-space coordinates）は一種の『第一哲学』の基盤であり、人間の存在を測る指標として、とりわけ自己のアイデンティティを理解するための根本的枠組みを提供する」。本稿では、時空論の視点から、大江文学からの実存主義及び「鳥」の自己構築を考察しようと思う。

特集　文芸と土地――場所をめぐる力学

土地は、人間に糧をもたらす環境であると同時に、生のありようを規定する制約でもある。人は感覚を通じて土地をとらえて意味づけを行い、また、働きかけによって社会的、文化的な空間を創り出す。固有の場における個別の営みから、歌や伝承、あるいは物語や小説が生み出されていった。さらに、文芸によって新たな価値を与えられた土地は、作品を受容する空間として、あるいは他の地域に作品を伝える中継点としての役割も果たすようになる。人と土地との交渉は、多元的な展開相を持つに至り、文芸の拡大、変容、深化、飛躍に寄与してきたと言えよう。

今回の特集では、日本文芸において、土地が表現や内容に及ぼした影響を立体的に考察する。特定の土地を舞台に生成した言語表象が自律的な存在となり、元々の文脈を離れて、新たな創造の源泉となる過程を、複数の時代、ジャンルの事例を通して検証してみたい。所与の条件であった土地が、理想化された風景に高められたり、非現実的な世界に転じていったりする事情に迫り、文芸史の新たな視点を得ることを目指す。

『とりかへばや物語』の宇治

京都橘大学　野村倫子

かつての宇治は奈良と北陸を結ぶ要衝の地であった。記紀の時代には雌雄を決する戦の場となり、忍熊王や菟道若子の終焉の地となった。菟道若子は宇治に祀られ、後に「宇治十帖」の八宮の造形に影響を与えることになる。やがて平安京が定まると、旧都平城京の中継地としての存在感をます。平安貴族の別荘地となり、また仏教色の強い地でもあった。すでに『万葉集』の時代に歌に詠まれていたが、『古今和歌集』で詠まれた「宇治橋」や「宇治の橋姫」の印象が物語の核となり、『源氏物語』の「宇治十帖」でこの地の印象が固定されたといってよかろう。平安の都から日帰りの移動が可能であり、都から姿を隠す絶好の場所となり、秘められた恋の地となった。

「宇治十帖」を言語レベルで引用し、実体のない物語を創造していったのが『とりかへばや物語』の女君に関わる物語であった。活発な性格から男性として官僚の道を歩んでいた女君であったが、心ならずも宮の中納言の子を懐妊してしまう。その身を宇治に隠し、出産したものの、生まれた我が子を残して姿を消す。そして、今まで女東宮付きとして後宮に務めていたきょうだいの男君と男女の入れ替わりを遂げたのち、女性の姿となって女東宮のもとに出仕することになり、官人であった女君は完全に姿を消すことになる。女君が宇治から姿を消したのは不誠実を気に病んで宇治川に入水したからだということを宮の中納言に納得させるために男君が繰り返すのが、「宇治の橋姫」の入水という物語であった。『古今和歌集』の橋姫は男を待つ女性を象徴するものであり、「宇治十帖」では宇治の八宮の娘である大君と中の君が、思いを寄せる薫と匂宮からそれぞれ「橋姫」と呼ばれたのであった。異母妹の浮舟も宇治で男君の訪れを待つ身であったが、和歌という形をとって正式に「橋姫」と呼ばれることはなかった。その浮舟の宇治川入水の物語を受けて、「橋姫」の入水という新たな物語が語られたのであった。男君が繰り返し語ることで、実際にはなかった女君の身投げが説得力をもって、宮の中納言のなかでは女君の喪失が現実のものとして納得されていく。「宇治」という場が、「宇治十帖」の浮舟入水の物語を経て、男君の言語活動を通して架空の女君入水の物語を現実化していく経過を物語から確認してゆく。

浦島伝説の地の変遷

静岡英和学院大学　畑　恵里子

上代に発生した浦島伝説は、おもに日本本土において広く享受されてきた。古くは『万葉集』一七四〇・一七四一番歌や『日本書紀』雄略天皇二二年条にも見られるが、より詳細に叙述されているのは『丹後国風土記逸文』である。「与謝の郡。日置の里。この里に筒川の村」「謂ゆる水江の浦の嶼子」とあり、丹後国の「水江の浦の嶼子」の話として、本作品が伝わっていたことがうかがえる（新編日本古典文学全集『風土記』小学館）。当地には、平安時代に創建されたという浦嶋神社も伝わっており（京都府与謝郡伊根町）、浦島が筒河大明神として祀られているという（浦島神社公式ＨＰ）。

平安時代の『浦島子伝』（『群書類従』）でも、「雄略天皇廿二年に当り、丹後国水江浦島子、独り船に乗り」とあり（重松明久『浦島子伝』現代思潮社、一九八一年。現代思潮新社、オンデマンド版、二〇〇六年）、「丹後国」を舞台としている。

それは後も同様であり、中世の「浦島の太郎」として伝わる話には「昔、丹後国に、浦島の太郎とて」とある（新編日本古典文学全集『室町物語草紙集』小学館）。

近世期になると、丹後国という叙述は必ずしも附随しないようではあるのだが、たとえば、舞鶴市糸井文庫『水江浦島対紫雲篋』には「丹後国」「同国与謝の郡」などとある。

すなわち、浦島伝説は、本来、丹後国を舞台とすることが、ある種の前提とされてきた作品ということになる。

ところが、現在は、丹後という固有の土地を、浦島伝説の舞台として想起することは、むしろ少ないのではあるまいか。それは、明治期に刊行された国定教科書の影響ではないかと、三浦佑之は指摘している（三浦佑之『浦島太郎の文学史―恋愛小説の発生―』五柳書院、一九八九年）。とはいえ、明治から現在に至るまで、ある程度長い時間が経過しており、現在もなお明治期の国定教科書の影響が残存しているとはいいにくいようにも考えられる。一方、浦島伝説は、丹後国のほか、たとえば横浜や木曽などにも伝わっていることが、歴史学の立場から報告されてもいる（三舟隆之『浦島太郎の日本史』吉川弘文館、二〇〇九年）。

そこで、本伝説における土地の持つ磁場がどのように変遷してきたのか、改めて問い直してみたい。

内田百閒『冥途』における幻想の場の生成について

大阪体育大学　吉川　望

内田百閒の第一創作集『冥途』（大正十一年二月、稲門堂書店）は、十八の幻想的短篇を収めたものである。発表者はこれまで、『冥途』の作品空間を作中の「私」の心象世界として捉えてきた。今回の発表では、このイメージの空間内にある非現実の場所について考察する。

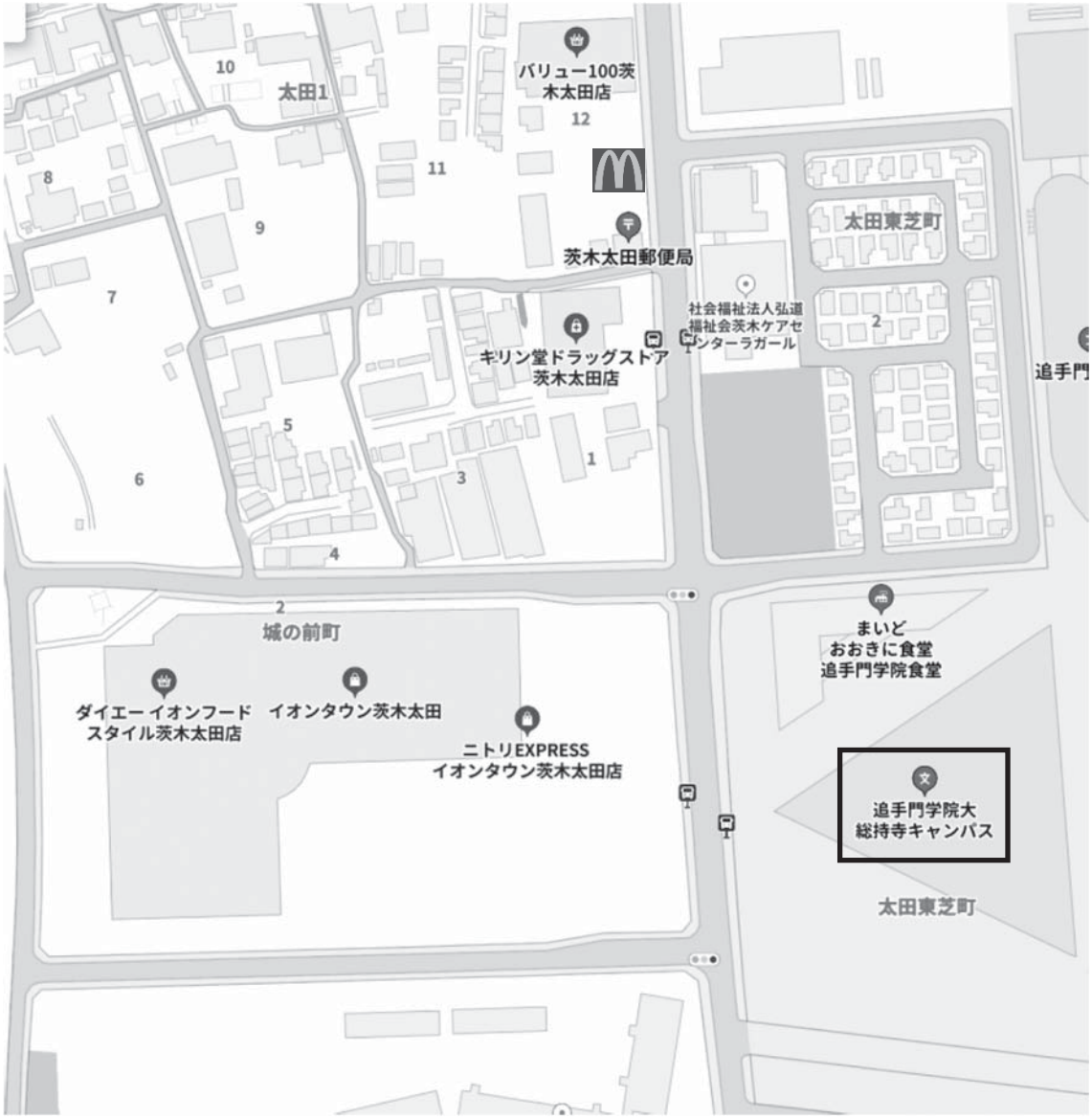
『冥途』において〈土手〉は、「私」が不可思議な事態に遭遇する場所である。早くから物語の舞台装置として着目されてきた。作者自身は後年次のように述べている。「私の旧作『冥途』にはあちらこちらに土手が出て来る。土手は淋しく悲しい。そのつもりで書いたのではないが、後から思へば若い時の感傷を土手に託した事は疑ひない」（「土手」）。こうした言説からは、百閒の随筆作品に多く見られる故郷岡山の、旭川や百間川の土手が「原風景」として『冥途』の場の生成に関わっているらしいことが窺える。

この例から取り出せる一つの検討課題は、場所の抽象性と不可思議な物語内容との関わりを明らかにすることである。『冥途』には、「牛窓」（「花火」）一つを除いて具体的な地名は登場しない。しかし〈土手〉の場合を踏まえると、百閒は、特定の具体的な土地や場所を取り上げ、これを抽象化して不可思議な物語の舞台としたと見ることができる。そこにはどのような必然性があったのだろうか。今回は、『冥途』に至る作品の改稿のありようを確認することで、検討していきたいと考えている。

『冥途』十八篇は、十年ほどの期間に、改稿を経てまとめられたという経緯がある。百閒は、大正十年七月までに複数の雑誌に分散して作品を発表したのち、十一年二月に『冥途』に収めて刊行した。十八篇のうち「烏」は、明治四十三年に第六高等学校の「校友会会誌」に発表され、大正十年七月の「新小説」に改稿したものが掲載された。つまり『冥途』の成立過程において最初と最後に位置する作品である。そしてその改稿の程度も大きい。ここで場所に関して触れると、明治四十三年の「烏」は、特定の土地の遍路宿を舞台とし、複数の地名や風景描写から宿の地理的位置までわかるのに対し、大正十年の改稿後の「烏」では、場所の固有性は剥ぎ取られ、どことも知れない場所に変えられている。こうした場所を抽象化する改稿のありようを物語内容との関わりという観点から具体的に分析する。

あわせて、同じく場と物語内容との関わりの観点から、十八篇全体の成立過程における変化についても確認することを試みたい。『冥途』の場には統一感があるが、そのような統一的な幻想の場の生成に向けた百閒の模索を動的に捉えることができればと考えている。

追手門学院大学付近図ならびに飲食店など



学会当日は、食堂（昼食提供）ならびに学内コンビニエンスストアは営業しておりません。

本学向かいのイオンタウン茨木太田内１階、２階、２階フードコートに各種飲食店がございます。また、バリュー100 茨木太田店の南側にマクドナルド、300m北にローソンがございます。昼食などについては、各店舗をご利用ください。

会場校への交通アクセス

●会場　追手門学院大学総持寺キャンパス　大阪府茨木市太田東芝町１番１号

●最寄り駅から徒歩（右図）

JR 総持寺駅から約 15 分

阪急総持寺駅から約 25 分

●路線バス

阪急茨木市駅・JR 総持寺駅から

70・73 系統　花園・東和苑行き

追大総持寺キャンパス前下車

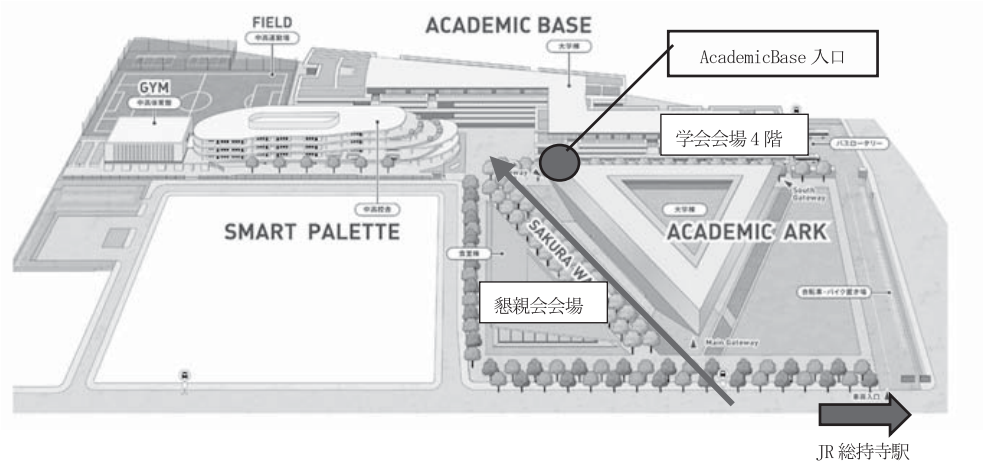
所要時間　約 15～20 分

	阪急茨木市駅	JR 総持寺駅
8	10　30　50	
9	10　30　50	
10	15　45	23　53
11	15　45	23　53
12	15　45	23　53
13	15　45	23　53
14	15　45	23　53
15	15　45	23　53

駅からのバスはキャンパス向かい側にあるイオンモール前に停まります。

★自動車でのアクセス

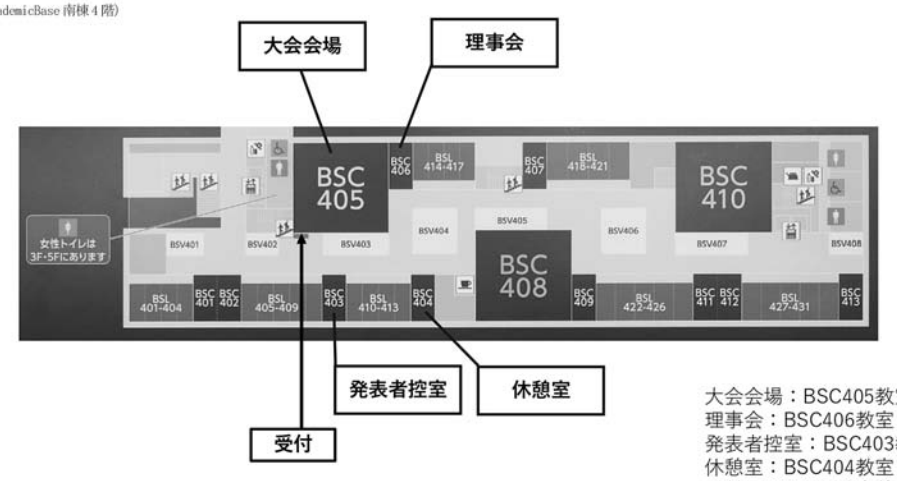
茨木総持寺キャンパス内には駐車場がありません。公共交通機関のご利用をお願いいたします。



※　会場は AcademicBase の４階です。AcademicArk 北側の通路を矢印の方向にお進みいただき、AcademicBase の入口（上図の丸印付近）からお入りください。

大会会場図

(AcademicBase 南棟４階)



大会会場：BSC405教室
理事会：BSC406教室
発表者控室：BSC403教室
休憩室：BSC404教室
受付：BSC405教室前